

profile

よしかわ・りえ ●1976 (昭和51) 年生まれ、東京都出身。高校時代、建築デザインに興味があったことから大学は建築学科へ進学。大学院自然科学研究科を修了後、2001 (平成13) 年に(株)竹中工務店入社。建築設計職、企画設計職を経て、現在は再び建築設計職に就き、大型プロジェクトに携わる。

輝け! けんせつ小町

建築設計

吉川理恵

株式会社竹中工務店
東京本店 設計部 設計第7部門
設計2グループ 課長



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



黒いスーツに、ハイヒール。その立ち姿に思わず「カッコよさ」と「美しさ」の両方を感じる彼女は、設計職の吉川理恵さん。デザインコンテストでの受賞経験や、女性専用の休憩スペース「こまちルーム」を企画・設計するなど多岐にわたり活躍している。

建物の設計は、まちとつながり人をつなぐ

「現在、設計を担当しているのはみなとみらい21中央地区20街区MICE施設*という、国内最大規模の多目的ホールを中心とする複合コンベンション施設です。建物と共に地区施設を整備し、駅や海に隣接する公園などの周辺環境に配慮しながら動線を描き、地域の回遊性を高めます。建物をつくるだけでなく、まち全体のつながりや人々のアクティビティを誘発する、非常にやりがいのあるプロジェクトです」

現在の仕事について実に楽しそうに語ってくれた吉川。その話しぶりからは仕事に対する熱意や愛情が伝わってきた。

「以前所属していた設計企画プロポーザル部門でこの案件のコンペを担当、受注を機に基本・実施設計を担当する現部門に異動しました」設計に興味を持ったきっかけを聞いてみると、「最初はアートの興味がありませんでした」と自身の高校時代を振り返ってくれた。

「理系と芸術系、どちらの道に進むか迷ったなかで、実は自分のやりたいことが『デザイン』という領域であることに気がきました」

ものづくりにおいて課題解決や価値創造の手段であるデザイン。その中でもなぜ設計を選んだのか話してくれた。

「身体の延長にある空間と自然環境の両面からデザインを考えていく建築に興味を持ちました。そこが建築設計の道を選んだ最初だったと思います」

この会社を選んだきっかけは、ある建築家との出会いだったという。大学院時代、吉川が入賞したデザインコンペの審査員だった建築家に、どのような場所で働くべきか相談したところ「竹中工務店はデザインを含め、ものづくりの一端から十を学べる会社だ」という答えが返ってきた。

「就職活動を通し、『ここは他社とは何かが違う』と感じました」

女性が働きやすいオフィスとは

住宅や学校の設計、企画プロポーザル設計など、入社後様々な仕事を経験してきた吉川だが、彼女ならではの仕事のひとつが、東京本店内にある「こまちルーム」の開設だ。開設の背景にあったのは、同僚たちのリアルな声を聞いたことからだった。

「女性が非常に多い企業のオフィスのコンペに向けて、計画案の参考に社内の女性にとってどんなオフィスが働きやすいか、ディスカッションをしました。すると、当社の課題もいくつか挙げられました」

作業着に着替える場所の充実。妊娠初期で体調が悪い時に少し休める場所、育児後の搾乳スペースなど。聞こえてきたのは、自分たちが置かれている状況によりフィットした環境を求める声だった。その声に当時の東京本店長が応え、女性のためのスペース設置の計画が始動。企画から設計、開設まで吉川が主導した。

「色々な意見や要望にこたえるためにどのような空間が必要なのかを考えるだけでなく、管理や運営方法まで想定しながら設計することが重要でした。自身の経験から必要だと感じたものの、同僚の声から分かったこと、それぞれを大切にしながらこまちルームは完成しました」

ドラフト感のない浸み出し輻射空調や柔らかな間接照明など、執務空間とは異なる女性に優

my Beginning

デザインのでまちの課題を解決する

私が建設業界に入った理由

*MICE施設：企業等の会議 (Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行 (Incentive Travel)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議 (Convention)、展示会・見本市、イベント (Exhibition/Event) の開催が可能な複合施設。



右上/東京本店のこまちルーム。オフィスのコンセプトである“オープン”とは逆に、“こまれる”ことを意識。
 右下/デスクワークも多い一方、吉川は毎日現場に出ることを大切にしていると言う。
 上/現場事務所のすぐ横にモックアップ。ここで建物の完成形について説明することもある。

my Growing

私が建設業界で学んだこと

「実現のために何をするか」を考える

とも多い。また、吉川の所属しているグループには他にも共働きのメンバーがいる。「メンバーは皆、常に時間を意識して働いています。Web上のスケジュールでお互いの業務や予定を共有しつつ、子供のお迎えや急な発病で休む時は、タブレットのメールで連絡を取り合いながら協力することができます。最近ではタブレットのスカイプを利用して遠隔地にいるメンバーと会議を行うこともあり、今後更にこうしたITツールを仕事と家庭の両立において活用することで、ライフイベントの際にも仕事を続けやすくなると思います」

現在吉川が担当している現場は、社内のモデル現場として、働き方改革を強く意識した現場こまちルーム開設と同様、社員にとってよりよい環境へ変化している真っ只中だ。

「過去には、女性は仕事か結婚・育児のどちらかを選ばなければならなかった時代がありました。しかし、社会や制度が働く女性を後押しするようになった今、『どちらもとる』という選択肢は、環境や周囲を含めた意識改革によって実現できるようになりました。男性が多い業界ですが、建築主や協議先の担当者が女性であることも多くなり、女性ならではの活躍の仕方も増えました。それぞれの個性や能力を生かし、性別に関わらず活躍できる業界になってきていると感じます」



「壁面はどのように見せるか」「その素材はガラス窓越しだとどのように見えるか」。様々なものを試しながら話し合いをする。

しい環境としたこまちルーム。体調不良時の休憩、更衣、搾乳を目的とし、婦社までの間、母乳を保存出来る冷凍庫を内蔵した洗面カウンターが整備されている。こまちルームの反響は大きく、その後同社の大阪本店や技術研究所にもこまちルームが開設された。

「仕事も育児も」という選択肢

吉川は産休・育休を二度取得しているものの、時短勤務の経験はない。どのような工夫をして働いているのか。

「仕事と育児を両立できるかを考える時、できない可能性に目がいき不安になりますが、まずは『やる』と腹をくくる。意識改革が最初の一步です」

両立するためのポイントは、やるためにどうするかを考えること。そして、周りの人との協力や環境を整えるのも不可欠だと吉川は話す。「私個人で心掛けていることが三つあります。

『コミュニケーション力は高く』『公私合わせて優先順位をつける』『完璧主義になりすぎない』ということ。限られた時間のなか、高効率に業務を進めるためにはどうすべきかが日々の課題です」

意識を変えてもひとりで両立はできない。吉川は夫も同業であるため夫婦共に多忙が重なり、母親の力を借りて子どものケアをお願いするこ



延べ床面積が約46,000㎡ある担当現場。設計、施工、事務をあわせて14名の女性が働いている。

日常から建築を見つける

「新人の頃、『二四時間、建築のことを考えろ』と先輩に言われて驚いた記憶があります。日常で接する建物から材料や照明の使い方など、学ばべきことは沢山あるということを意味した言葉でした」身近な場所や外出先からも、新たなヒントを得ることが多いという。

また、日々の業務をこなしながら更に先の未来も意識し始めている。「ハードとしての建物をつくることから、更にその建物が生み出すソフトとしての場所づくりまで、今後はより一層『モノづくりとコトづくり』を意識したいです」

my style

休日は家族で千葉の海に行き、釣りをすることが多いです。もともとは魚を見るのも触るのも苦手でしたが、主人と子供の趣味に付き合ううちに今では魚を捌くことも楽しみとなってきました。海と波の音に囲まれ、暫し建築から離れるひととき、と思っていたら、霞んだ海の向こうに横浜の現場周辺のシルエットが見え、驚きました。



家族みんなでする釣りは、リフレッシュになる。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと